

「こないだ半分位讀みました」と返事をする。彼はニッコリ笑て『さう、相變らず輕快な筆つきだね』と云ひ乍ら再び本の上に目を投て讀み出した。その向ふの前教頭關本恩師の肖像の下では頻りに卓の縁をコック／＼叩き乍らE君が『法華』か何かを見て居る。僕は目をそらして高い所に在る昨秋の御大禮式の洋畫を見上げた、そして痛く莊嚴な感に打たれて居るところへガタ／＼と亂暴にドアを開けて例の氣早者の×君が這入て來た『おい、文章世界の古い奴は無いか?』斯ふ言ひ乍ら彼は柵の隅やケースの奥を視いて漸くそれを見つけたのか『あつたぞ／＼、ウンさうか』と云つた儘本を投出して又ガタンピシヨンの音忙しく外へ飛び出して廊下を馳て行つた。僕はあゝやつぱり彼奴はあわて者だと思つた。

ひと頻り圖書室の障子を搔すつて居た風が過ぎ逝くと再び躰がグンニヤリとだるくなる程あたゝかい僕は明るい光線の方へ向き直つて頬杖をついた。そして閉ぢることもなく靜かに眼を閉ちて斯んな事を考へて見たりした。

あまり廣いとは云へないけれど氣持よい此の圖書室の中で毎日多くの人が獲得する信念と智識、それは非常に偉大なものでなくてはならぬ、浮世放れのした此雲霧の中に在る學校に居乍らも、よく時勢の進運向上を追つて行く事が出来るのは全く此室の賜である。

段々、僕の心が夢裡に落ちて行くに従つて、可愛いアネモネの花が、次第／＼に、僕の眼界から消へて行つた。(日曜の或る日に)

梅花似雪

森 亮 遠

吹く風にはまさりせば梅の花

たゞ積も雪そのみ見てました

雪 中 梅

ふり積る雪の梢に咲き出て、

かせをたよりに匂ふうめかな